

## フジテレビ主催「イタリアまつり・バチカン展」

### 企画までの経緯

2001年は「日本におけるイタリア年」でした。その為、フジテレビ以外にも、朝日新聞社や日本経済新聞社が、絵画展、映画展、オペラ、音楽祭等々、1年間で約50イベントが企画され、実施されました。フジテレビでは、その数年前の「日本におけるフランス年」でも東京お台場の国際展示場で「フランスまつり」を開催し、ゴールデンウィーク9日間で約40万人を集客しています。

「イタリアまつり」開催のほぼ1年前に、フジテレビの担当プロデューサーとお会いし、企画の概要をお聞きしました。出展予定者の多くは、イタリア政府観光局やイタリア関連の企業、飲食関連の出展がほとんどでした。

しかし、イタリアといえば、世界で最も信者の多いキリスト教の総本山であるバチカン市国や、現代の科学・文化・芸術等多くの分野に多大なる影響を与えた「ルネッサンス」を忘れることは出来ません。当社では、このふたつが最も重要な意味を持つと判断し、どのように表現（展示）するかを考え、提案することとしました。



### 企画の主旨

今回の「イタリアまつり」で最も重要なことは、このイベントの「核」を作り、どのように表現するかということでした。

今の日本人の多くは、イタリアといえばスパゲッティ・ピザを始めとする美味しいイタリア料理とワイン、グッチ・セリーヌ・フェンディ・フェラガモ・アルマーニ・ベネトン等の高級有名ブランド、フェラーリ・ランボルギーニ等のスーパーカー、そして中田や中村が活躍するセリエA（サッカー）位しか頭に浮かべません。

しかし、イタリアまつりに来られた方が、単にイタリア料理を食べ、ブランド品を買い、ショーを見て楽しかった、というだけで帰ったのではイタリアの本質を何も伝えていないのと同じではないか、もっとイタリアの人達の生きる上での精神的なベース、文化の根っこの部分をなんとか伝えられないか、をテーマに出展物を考えました。

西欧文化の多くはキリスト教（聖書）がベースになっており、それはハリウッドの映画においても、いたるところで聖書からの引用がありますが、それを知っているのと知らないのでは理解する度合いが全く違ってきます。

同じように、ルネッサンスを知らなければ芸術・文化に対する理解度が極端に低くなります。

これらをストレートに表現すると、単にキリスト教を布教しているかのようになってしまいますが、わたくし達が伝えたいのは、長い人類の歴史の中で培われてきた神と人との関係、信仰というものがものすごいエネルギーを持っていること、神（未知なるもの、宇宙の不思議）に対する敬虔さ、祈ることの大切さ、というようなもっと普遍的なことでした。

このテーマをいかに表現しようか、何を展示し、どのようにブースを装飾すれば、来場者の皆様にイタリアをより深く理解していただけるか、が企画のテーマとなりました。

## 企画立案作業

企画主旨を最も簡単に理解していただくには、このイタリアまつりに「ミニ・バチカン」を出現させることだ、と考えました。

サンピエトロ寺院を彷彿とさせる石の列柱、システィーナ礼拝堂をイメージさせる天井壁画、聖ピエトロ大聖堂の中で最も有名な、そしてルネッサンスを代表する最も有名なミケランジェロの彫刻「ピエタ」像、ローマ法王が大聖年の扉をお開けになった時に御召しになっていた法衣、それら以外を補う為のバチカン内部の写真パネル。

これらが存在する空間に足を踏み入れてもらえれば、何かを声だかにメッセージしなくても、体全体で敬虔な気持ちを感じてもらえるはずだと考えたのです。この企画をイメージしたブースのスケッチ、パース図をフジテレビに提出しました。これを見て、担当プロデューサーは本当にこれが出来るのなら、ぜひやって欲しいとのGOサインをいただきました。実はこの時点以前にパース図を完成させ、「カトリック中央協議会」、「聖パウロ女子修道会」、「カトリック東京大司教区」、「白柳枢機卿」、「ローマ法王庁大使館」、大聖年記念に「ヴァチカン」の単行本を出版された著者、写真家、出版社の代表者の方々をお訪ねし、企画の主旨をよく御説明し、ご協力の内諾は得ておりましたので、それをいかに実現に向けて進めていくかが、それからの課題でした。

## 実作業

企画は通ったものの、それを実現させるには多くの関門が待っていました。

まずはピエタ像をお借りする為に、多くの関係者にお会いし、バチカンにお借りできるよう手紙を書いていたいたり、当社から社員2名をイタリアに派遣したり、あらゆる手を尽くしたのですが、このピエタ像だけはバチカンから外に出さない、という決まりがあってお借りできませんでした。

しかし、世界に2つだけ同寸のレプリカが

あり、そのひとつが日本の「カテドラル大聖堂」に安置されていることを知り、期間中に限ってお借りすることが出来ました。（聖堂から外に出るのは初めてのことだそうです）この作業だけでも大仕事でした。



像が安置されているのは聖堂の一番奥で狭い場所でした。しかもその重さは3トンです。その為、手動のクレーンを聖堂の中で組み立て、わずかに宙吊りにして通路へ出し、ゆっくりと移動させて玄関まで出し、今度はクレーン車で美術品を運ぶ専用のトラックに移し変える、この作業は国際展示場でも、また会期終了後も全く逆の作業があるのです。展示場でも一番の大作業ですから、まず何もない会場に一番に台座を作り、クレーン車で設置します。他社のブース設営はこれが終わらなくては出来ません。



ローマ法王が大聖年のミサに御召しになっていた法衣をお借りすることが出来ました。(これも初めてのことであり、その後は一度も貸し出されたことはなく、今でもバチカンへ行っても見ることが出来ません。)この為に、イタリアからシスターが2名派遣されてきました。保険はかけてあったのですが、もしもの場合を考え、会場内の警備員以外に専属のガードマンを会期中昼夜問わず常に2名を配置しました。

当初は、法王をお護りするスイス兵にも4人ほど来ていただく予定でしたが、ちょうどイタリアまつり会期中に法王が外国にお出かけになる予定が入り、スイス兵が来ることは出来なくなりました。

代わりにマネキンに着せることになり、そのマネキンのサイズに合わせて、衣装、首飾り、ベルト、帽子、ヘルメット、ブーツ式(4人分)を作ってくださいることになりました。まずは借りるマネキンのポーズを決め、すべてのサイズを計測してバチカンへ送りました。成田には本物の刀と槍も送っていただいたのですが、銃刀法の関係で会場には飾ることが出来ず、急遽、複製品を制作して間に合わせました。

他にも似たような一杯あるのですが、あとは推して知るべし、ということで割愛させていただきます。

## 会期中の出来事

今回の企画は、最初はほとんどの方が実現するといいいですね、というレベル(実際はどうしたって無理でしょう、とみなさん思っていたようです)だったのですが、関係機関・団体の方達の熱意と行動力で、わたくしたちが考えていたのとほぼ同じレベルで実現することが出来ました。

その為、会期中にわたくし達が予想もしなかったことがいくつも起きました。

その代表的なひとつが、出展者の中にはイタリア本国からも多くのイタリア人が来ていたので、オープン前の時間に、わたくし達のブースで是非ミサを行ないたいという要望があり、神父様をお呼びして実際ミサを行なったのです。このような会場の中で宗教儀式が行われたのは異例のことでした。





また、普段は修道会の中でしか歌うことの無いシスター達も舞台上に登場し、その清らかな歌声を聞かせてくれました。



家族で来場され、小さなお子さんがピエタ像の前に来た時、その子がお母さんに「お金をちょうだい」といってお金を貰い、そのお金をピエタ像の前に献金したのです。このようなことが頻繁に起こった為、2日目か3日目にはピエタ像の前に献金箱が設置されました。

ブースの中にはキリスト教関連のアクセサリや書籍などを置いたコーナーもあり、普段そのようなものを目にしたことがない若い女の子たちがキャーキャー言いながら買い物をしていました。その中の一人がシスターに「このネックレス（ロザリオのことです）可愛い。でもこの裸のおじさん（キリストのことです）が付いていないのではありません？」これにはシスターもびっくりで、大笑いでした。普段、シスター達は、教会に来られるクリスチャンか、教会が書店の中に出展しているところに買いに来られる方ぐらいしか、世の中との接点がないのですが、今回、来場者 30 万人中、20 万人以上の方がこのブースを訪れ、キリスト教とは全く関係の無い方達と触れあうことが出来、世の中の方がどのような感覚を持っているのかを直接知ることが出来て、大変喜んでいらっしゃいました。

主催者であるフジテレビも、ゲスト（VIP）が来られると、社長を含め役員の方達が、まずわたくし達のブースに御案内して説明されている姿も印象的でした。

クリスマスカードコーナーには、この連休中にこの場所で、愛する家族や友人、恋人に手紙・カードを書いて切手を貼っておけば、その年のクリスマス前にパチカンのスタンプが捺されたものが送られて来る、ということで長蛇の列が出来ました。

ブースの運営協力をいただいた4つの修道会の皆様が自主的に、聖書の中から何種類もの御言葉を小さな紙にプリントし、それを小さく丸めてリボンで結んだものを約20万個も作って下さり、通路を歩く方達に配ると、宗教や信仰とは全く関係のない人達でも、そのメッセージを読んで納得したり、よーし今日一日はこれでいこうとか、友人の分もくださいとか、いわばおみくじのような形で、楽しんで受け入れられていました。



## 感想

今回のイタリアまつりのパチカン展はまさに、当社の方針のひとつ、未来に向かってメッセージできる仕事、主催者と参加者がともに喜び楽しめる企画、国際交流に貢献できる仕事、に当てはまり、まずは実現する為にあらゆる努力をした結果であると思います。当社のような小さな会社でこのような仕事ができることは、まさに大いなる力が働いたとしか思えません。感謝あるのみです。

